

# ナイチンゲールの稿本「カサンドラ」をサンドの『レリア』を背景に読み解く

岐阜県立看護大学 木村正子

## 1. はじめに

本論は、フロレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) の稿本「カサンドラ」(“Cassandra” 1852) がジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-76) の自伝的小説『レリア』(Lélia 1833; 改訂版 1839) の影響を受けて執筆されたのではないかという仮説をもとに、「カサンドラ」を読み解くものである。

先行研究の中にはナイチンゲールとサンドの共通点を指摘したものがあり、中でもマーク・ボストリッジは、ナイチンゲールの主張が『レリア』の女性主人公と共通している (104) と述べ、本論のテーマともピンポイント的に共有するものがある。しかしボストリッジはこの点に言及するのみで終わり、さらなる議論へ結びついていない。根本的な問題として、ナイチンゲールとサンドの使用言語が異なるため、両作家の研究においても言語の壁を越えての比較研究は容易ではない。両者の接点が明確でない限り、研究対象となることは困難であろう。本論における議論の起点はまさにそこにある。ナイチンゲールの「カサンドラ」にはサンドの『レリア』からの引用があり、また『レリア』出版当時のナイチンゲールがサンドを女性のキャリアの成功例のモデルケースとみなしていた記録が残されている。これらの接点を見出したことから、本論は、「カサンドラ」は『レリア』を下敷きにして執筆されたのではないかという仮説を立てた。

本論では、ナイチンゲールがサンドの作品からどんな影響を受け、それを自身の作品の中でどのように昇華したのかという点に注目する。『レリア』はサンドの自伝的要素を多分に含む小説であるが、同時に当時のフランスの若い世代、特にロマン主義作家たちに共通する「世紀病」を表象する作品でもある。ナイチンゲールは、この「世紀児」たちの苦悩を 19 世紀イングランドの女性の苦悩に置換したわけだが、そこからナイチンゲールはどんなヴィジョンを描いたのかという点を論じる。

## 2. 「カサンドラ」の概要

「カサンドラ」は 1852 年に執筆されたというのが定説であるが、公式出版は作者の死後、1928 年である。生前のナイチンゲールは 1860 年頃に『思索への示唆』(Suggestions for Thought) というアンソロジーを私家版印刷し、その中に「カサンドラ」を所収している。この時点の「カサンドラ」はすでにエッセイのスタイルとなっているが、草稿段階ではノファリアリを主人公とする小説のスタイルであったことが、大英図書館蔵の稿本から明らかである。しかもこの稿本「カサンドラ」は『レリア』と酷似している。たとえば、筋書きのない物語、登場人物による一人称の語りと第三者による語りの混在、30 歳くらいの独身のヒロインの憂鬱など、枚挙にいとまがない。にもかかわらず、これまで両作品の類似点を指摘した論が稀少だったのは、「カサンドラ」がエッセイスタイルに変更されたことで、共通点の多くが抹消されたためである。

本作品のタイトルに掲げられた「カサンドラ」は、本来ギリシア神話・悲劇に登場する予言者の名前である。トロイの王女であるカサンドラはアポロン神から予言の力を授けられるが、同時に神の求愛を拒んだために、その予言を信じるものは誰もいないという呪いをかけられる。ナイチンゲールはこの古代のカサンドラの苦悩をヴィクトリア朝女性ノファリアリの苦悩に置換した。ノファリアリは、〈女性〉であるという理由から男性と同様の社会活動を許されず、逆に有無を言わず家庭に縛られ、他者への奉仕を義務づけられる。作中、ノファリアリは延々と自身の苦境を訴え続けるが、やがて心身消耗によって死を迎えることになる。ノファリアリの苦悩と死は一見、女性に容認された生き方を逸脱し、男性の領域に足を踏み入れようとしたことに対する懲戒のように見えるが、ナイチンゲールは、ノファリアリの苦悩はヴィクトリア朝女性一般の苦悩であり、それを救うには「女性救済者」(“female Christ” 11: 589) が必要であると説く。というのも、ナイチンゲールは別の作品「イングランドの家族の物語」(『思索への示唆』に所収) でも同様の主張を展開し、現前する社会は神と自然の摂理のもとに構築されたものではなく、人間の男性が政治や宗教という形で力を行使し捻じ曲げた姿であると述べている (11: 567)。それゆえ女性を救うのは女性であり、次の救済者 (Christ) は女性であるべきだというわけである。予言者の名前を冠する「カサンドラ」はまさに、女性救済者の到来を予言し、ノファリアリにはその先触れの役割が課されているといえる。

## 3. 『レリア』からの影響

『レリア』は、ヒロインが自身の性的関係に関する不満を赤裸々に語る作品として、初版出版時に文壇から批判を浴びた作品であり、6 年後に大幅な修正を施して再出版された。ナイチンゲールの記録には、作品名は

明記されていないものの、『レリア』改訂版が出版された翌月に「サンドの作品を夢中で読んでいる」という記述がある(1:293)。しかしながらナイチンゲールの関心を引いたのは、レリアの冷感症とその告白というセンセーショナルな側面ではない。サンドは『レリア』改訂版の序文に、この作品はサンド自身を含む当時のロマン主義作家たちの間に蔓延した「世紀病」という憂鬱症を、それぞれの登場人物の行動や心情によって表象したものであると記述している(Lélia 2)。ナイチンゲールはこのモチーフを採択し、『レリア』のヒロインとよく似た背景を持つノファリアリを設定し、舞台をヴィクトリア朝イングランドに移した。『レリア』からの一節“L'enthousiasme and [sic] la faiblesse / d'un temps où l'intelligence monte très-haut, / entraîné par l'imagination, et tombe très-bas, écrasé par une réalité, / sans poésie et sans grandeur” (Lélia 2) が「カサンドラ」に引用され(11:584)、ナイチンゲールがサンドの影響を受けたことを伝えている。

しかしこの一節に関する両作品の文脈は異なる。サンドの文脈ではレリアの恋人で若き詩人ステニオの軽信性(Journal Intime 145)を揶揄し、独善的な態度がやがて自己崩壊を招くことへの警告となっているが、ナイチンゲールの文脈では、社会が若者たちの夢と熱意を煽りながら、突然非情な現実を突きつけ、その夢と熱意を打ち砕くことへの批判となっている。個人と社会、どちらに苦悩の原因を帰するかで、サンドとナイチンゲールは正反対の立場に立つようだが、実は両者とも、社会慣習的に「あたりまえ」のこととして受容する態度に否を唱えることで一致する。サンドによると、『レリア』は「懐疑を描く作品であり、懐疑論を主張する」ものである、そして恋人への不信感も含めて、「(レリアの) 懐疑は不可侵の権利である」(Lélia 2)。同様に「カサンドラ」においては、ノファリアリが社会そして家族の同調圧力に抵抗することを認め、さらにノファリアリの主張を擁護することから、ナイチンゲールは『レリア』の核心である「懐疑」の理念に賛同したといえる。

#### 4. ナイチンゲールのヴィジョン

「イングランドの家族の物語」では、女性の「成長」の成功例としてジョルジュ・サンドの名前が挙がり、作家としての経験でキャリアを積み上げるサンドは、この作品のヒロインおよび作者双方にとって、女性の人生のロールモデルであったと推測される。しかし後続の「カサンドラ」にはサンドの名前はない。代わって登場するのは予言者カサンドラ、そして旧約聖書「イザヤ書」40章3節を模したエピグラフ“The voice of one crying in the ‘crowd,’ ‘Prepare ye the way of the Lord’” (11:547)である。ここで言及されるのはキリスト教会設立以前の〈神〉であり、現前する社会状況への不満、そして社会システムへの懐疑は、この世界の再構築の必要性という考えに至る。それゆえナイチンゲールは、根本的な解決策として新たな〈神＝救済者〉を希求する。

サンドの『レリア』は「世紀病」という当時の社会が生み出した心的状況を描いたが、これに対する解決策は何も提示していない。一方「カサンドラ」のノファリアリは、たとえ自分の行いが無に帰したとしても、自分が生きて行動を起こそうとしたその記録を後世に残したいと願う。それは「群衆」の中にかき消されるほどの小さな声かもしれない。しかし神話・悲劇のカサンドラ以来、多くの〈カサンドラ〉たちが歴史の中で夭折と早産を繰り返しながらノファリアリに至った時、ナイチンゲールはノファリアリを歴代の〈カサンドラ〉の複製とはせず、未来への提言を行う存在に昇華したのである。

#### 5. 結び

サンドの『レリア』からインスピレーションを得たナイチンゲールは、ノファリアリという女性を通して、ヴィクトリア朝女性の苦悩と怒りを表出し、その状況から女性を救うのは既存の社会の仕組みでは不可能であるという結論に至った。既存の社会を再構築するために、「カサンドラ」では「女性救済者」到来のヴィジョンが提示されたわけだが、これはサンドの作品にはない、ナイチンゲール独自のメッセージである。今後の研究テーマとして、「イングランドの家族の物語」と「カサンドラ」の間に何が影響したのかを追究したい。

#### 引用文献

- Bostridge, Mark. *Florence Nightingale: The Woman and Her Legend*. Penguin Books, 2009.
- Nightingale, Florence. *Collected Works of Florence Nightingale*. Edited by Lynn McDonald, et al., Wilfrid Laurier UP, 2001-12. 16 vols. 本論ではこの全集からの引用を(巻数: 頁数)で表記する。
- Sand, George. *Lélia*. 1839. Michel Lévy Frères, 1867.
- . *Journal Intime*. Calmann-Levy, 1926.